

三 産物御用掛方日記

(同治八年)

一六八九号



## 解題

本号（二六八九号）は、表紙に「同治八年己巳正月より産物御用掛」と記されている。表紙の一部が破損して題名の後半部分は読みとれない。しかし、「旧琉球藩

評定所書類目録」（一六〇六号の解題参照）によれば、一八二九年から四二年までは「産物御用掛方日記」（一二七号・一一四九号・一二〇〇号・一二九五号）、一八五三年から六四年までは「産物方御用掛日記」（一五〇六号・一五二八号・一五四三号・一五七五号・一五八九号・一六二二号・一六二八号・一六三七号）、一八六五年は「生産方掛日記」（一六四四号）、一八六七年は「生産御用掛方日記」（一六八〇号）、一八六九年は「産物御用掛方日記」（二六八九号）、一八七一年は「生産御用掛方日記」（二七〇〇号）と、本号を含めて十六文書

あったことが分かる。

なお、一八四三年～五二年の十年間と一八六六年・六八年の二年間については目録に無い。また、時期によって若干名称が異なっているが、それは「産物方」という部署の名称が変更したのにもなうものであろう。本号は、警察庁旧蔵（現在、国立公文書館所蔵）の文書であるが、東京大学法学部に所蔵されていた右の文書が、関東大震災で烏有に帰したのはまことに残念である。

本号の題名は、前記目録の通り「産物御用掛方日記」である。一八六九年（明治二）の正月から一年間の日記が収められており、一六八七号の「産物方日記」と重複する文書が多い。例えば、二月二七日付の往復文書、三月十六日付の「覚」、四月二二日付の「覚」、同年夏の進貢船で買って帰った「葉種取入斤数并代付」のリスト（同年六月）、六月（日付無し）の「口上覚」・同「覚」（代付小帳）等が重複している。

右の「葉種取入斤数并代付」のリストの末尾に「右当夏進貢船より買來候御葉種御取入斤数并代付如斯御座

候」と記されている。薬種は、五月二十七日から翌日にかけて昆布座の蔵に運び込まれ、同二十九日に附役野間休右衛門から「御前御用并御臨時方御薬種買立帳」の提出を求められ、六月七日にそれを差し出している。

また、王府生産方御用掛から評定所への文書は、進貢船の「役者」連中から「薬種の値段が安いので値上げしてほしい」との申し出があったことを示している。その「役者」連中の「口上覚」（前記）によれば、中国に着いたのが遅かったために、琉球から持つて行った品物の売値は安くなつたし、そのうえ「異国人」が昆布や干藻を大量に持ち込んでいたので、安値で売らざるを得なかつたことが分かる。したがって、彼らは少ない予算で薩摩藩の注文通りの品物を買って帰るのに大いに苦労したが、「薬種取入斤数并代付」のリストの通りの値段では「買元代格別引入」（中国で薬種を買ったときの値段よりもかなり安く見積もられている）と、小唐船及び大唐船の総官・脇筆者・大筆者・脇通事・官舎・大通事・才府らの連名で値上げを要求したわけである。

「役者」連中が提出した「代付小帳」（二冊）によれば、薩摩藩が注文した「御前御用」と「御臨時方御用」の薬種の代銭は、トータルで丁銀十一万四二〇一貫三八〇文から十九万九三八貫二四〇文に増えている。約一・七倍の増額である。その中でも特に肉桂（五・四倍）、阿膠（四・一倍）、山出人参（約二・九倍）、大黄（約二・五倍）などの増額が目立っている。

「役者」連中の主張によれば、「私共こと困窮の者に、渡唐仕廻方（中国へ渡る準備）も拝借又は脇方より借錢をもってまかり渡り申したること御座候ところ、存外不景気の旅柄差し当たり、（中略）唐江払用持ち渡る品々（中国で売る目的で持ち渡つた品物）：高料（高値）に及び候については、唐品も直増相払（値段を上げて売り）申さず候ては諸首尾引き結び難く（帳尻が合わない）ので、身上禿入り申すべきと必至と心痛仕り居り申すこと御座候」と、中国における取り引き条件の変化などを理由に、予想外の損失が出たというので値上げを要求したのである。

（仲地 哲夫）